



校長会



No.56

三重県小中学校長会 広報 第56号

●発行●三重県小中学校長会 津市桜橋 2-142 三重県教育文化会館内 TEL 059-227-7011 E-mail info@mie-kochokai.com  
●編集●三重県小中学校長会 広報委員会 ●印刷●光出版印刷株式会社 松阪市久保町 1885-1 TEL 0598-29-1234



### 校舎

日々、カメラを片手（いや両手かな？）にステキなシーンを見つけてはシャッターを切り、学校だよりや町の広報誌等を通して、子どもたちや保護者・地域の方々に「度会中のステキ」として発信し続けています。度会郡の中ほどにあって、一町一中小、高校と特別支援学校もある度会町。本校では約二百名の生徒が、豊かな自然と地域の方々のおたたかい支援のもとで、のびのびと学校生活を送っています。

例年なら、一学期は茶摘み、ブルーベリー収穫体験、地元イベントへの参加、各種大会やコンクールと、様々な場面で輝く子どもたちの姿でいっぱいなのですが、新型コロナウイルスの影響で、軒並み中止や延期に……。でも、そんな中だからこそ見つけることができた「ステキ」がありました。

例えば、三月の卒業式。入場者制限

### 私の学校づくり

### コロナ禍でも

### 「ステキ」発信

度会町立度会中学校

校長 中村 真也



と時間短縮での実施となり、会場設営は職員で、式の練習は一度もなし。進行について説明ができたのは当日の朝で、十五分ほどでした。しかし、卒業生は真剣に説明を聞き、何をすべきか考え、仲間の動きを見て修正を加え、堂々と卒業証書を受け取りました。まさに、「義務教育の締めくくり」を実感した瞬間でした。

九月に延期となった体育祭と修学旅行は、感染症予防対策のもと、たくさん制限と規模縮小で実施しました。このとき、代表の生徒が仲間呼びかけたのは、「規模縮小を嘆くのではなく、できることを精一杯楽しもう！」そして、そのとおりに彼らは実行しました。

コロナの影響で学校生活は圧迫されていますが、その渦中でも子どもたちはたくましく成長しています。まだまだたくさんさんの「度会中のステキ」が発信できそうです。

# 今日的課題の克服に向けて

## 学校の存在意義と教育の本質

多気町立外城田小学校

校長 久保田 博行



緊急事態宣言が出され、全国一斉の休校要請が行われました。目的が「子どもを守るため」となれば、やむを得ないことです。

しかし、私は学校再開後に休校による「遅れ」対策の議論が、特に学力の部分に特化されていること、また、「学校や教師の存在意義」について多少し偏った報道となっていることを危惧しています。なぜなら、学校には学力のみならず、情緒や道徳心等、子どもの発達成長全体を担保する責務があるからです。コロナ禍の中、国は「感染抑制と

経済活動」の両立を推進し、学校現場には「感染防止と教育活動」の両立を求めています。感染防止の観点から他者と繋がること、集団で感動体験を重ねることが難しい状況にあります。これは、子どもの育ちの基盤となる、情緒や道徳心、自己肯定感等を培う機会が希薄になることを意味します。「わざわざ集めて学習する」という学校の存在意義に関わる部分でもあります。

現在のような時代の転換点に立つ私たちに必要なことは、「進取の気性」だと考えます。

文化史者の竹下節子さんは、「健康」とは「病気や障害がないこと」ではなく、身体的、精神的、社会的、霊的に「良好な状況」であることと定義されています。学校はコロナ禍の中で教育の本質を死守せねばならず、閉塞感満載です。少なくとも、子どもたち、職員が一刻も早く「良好な状況」に向かうよう、「進取の気性」を念頭に舵をとっていききたいと決意を新たにしています。

学校再開後、教室で教師が子ども一人ひとりと対峙して、教材や発問等を通じて語りかけること、子どもの言葉や表情、姿勢や眼差しをしつかりと見取ること、そんな「授業」の大切さを実感しています。モニターを通してではあり得ないことです。教師の存在意義がここにあります。

また、「集団での活動」には、葛藤や対立、衝突がつきものです。学校は「様々な経験を積む場」であり、「トラブルが起きるところ」です。大切なことは、子どもがそこから「何を、どう学ぶか」です。壁にぶつかったり、思い通りにならなかったりという経験は、とても大切で、子どもに忍耐力や協調性等、社会に必要な多くの力を育てます。「わざわざ集めて教育する」という学校の存在意義がそこにあります。

教育現場においては、子どもが教師のことを「大好きな先生」と言える関係を構築できれば、それだけで大成功です。その人間関係が「やる気」や「意欲」の源泉となり、学力以外の部分でも極めて大きな成長に繋がるからです。

「大好きな先生」は、ぶれない教育理念、子どもを育てるという使命感や愛情と自分を突き動かす「原動力」を持っています。そして、子ども

もと対峙することの大切さ、生活背景を含めた児童理解の必要性を理解し、「他者への想像力」を培うこと、妥協できる集団作りや主体的な学びを大切にしたいわかる授業の実践者でもあります。

「信頼される学校」は、学習面、生徒指導面で多様な指導ができる教師さえいれば、自ずと成立します。その意味でも人材育成は教育現場の要であり、大きな課題です。

「どんな先生に育ててもらおうか」その子の一生が変わる」と言われます。今後、新たな課題に即応できる指導力を備えた教員が求められます。その期待と責務に応えられる教師、学校でありたいと願います。

## いろいろな方々との連携を

川越町立川越中学校

校長 井上 勝史



来年度中学校において新学習指導要領が完全実施されます。それに向けての授業改善が進められています。その中でGIGAスクール構

想への対応を進めなくてはなりません。同時に働き方改革も進めなくてはなりません。その中で、新型コロナウイルス感染拡大防止のための臨時休校、それにともなった行事の見直し等、現在の現場における課題は山積しています。

その課題の多くは学校だけの力で克服できるものではありません。教育委員会等との連携が必要になります。また、それぞれの課題は互いにリンクしているものもあり、単独で克服できないものもあります。それを意識しながら克服に向けて取り組んでいくことが大切だと考えます。本校が取り組んでいる一例を紹介させていただきます。

### Ⅰ ICT環境の整備

GIGAスクール構想もあり、学校のICT環境の整備が必要になってきています。

昨年度本校は川越町教委のサポートを受け、校区内の二小学校とともに、各教室のWiFiルーターやプロジェクターの設置などICT環境の整備をしました。そして、生徒用タブレットを「三クラスに一クラス分の配備計画」に基づいては配備しました。同時に、教員のスキル向上を図り、ICT支援員も配置していただきました。

今年度末には、一人一台環境が整

備され、来年度から運用が可能になる予定です

**二 ICT支援員との連携**

週に一回来校するICT支援員の方にはいろいろな支援をお願いしています。

具体的には、授業へのICT機器の取り入れ方の相談やICT機器の準備、機器操作の代行や生徒からの機器操作に係る質問への対応などの授業支援、教員向けの講習会や模擬授業などの活用のための支援、情報共有の活性化や校務の効率化の校務支援、機器の障害に対する一時対応など様々な支援をお願いしています。

**三「学び合い深め合う授業」の実現に向けて**

本校では研修委員会主導で町教委等と連携し、継続的に「わかる授業」づくりに取り組んできています。現在は新学習指導要領完全実施に向け、「学び合い深め合う授業の実現に向けた授業改善」をテーマに学校全体で主体的・対話的で深い学びの視点から「どう学ぶか」を重視して授業改善に取り組んでいます。その取組を進めていく中で、ICT支援員の力を借りながら昨年度整備した機器を効果的に活用して、その取組を進めています。

具体的には、町教委と連携して、

教育アドバイザーを招き、各学年がそれぞれ年三回授業研究と事後研修を行っています。併せて、教科で縛らず六人一組のチームを編成し、それぞれが年間一回以上の授業公開と事後研修を北勢教育支援事務所と連携して川越エキスパートと名付けて行っています。

**三 おわりに**

このようにいろいろな方々の力を借りながら、環境の整備、授業力の向上に取り組んでいます。

ここにあげさせていただいたのは本校の取組の中での一例です。学校のような課題の克服には、学校に勤める職員だけでなく、町、教育委員会、保護者、地域の方々等、様々な方面の方々との連携が必要です。これからも、いろいろな方々との連携を図りながら取組を進めていきたいと考えています。

**コロナ後にさらに充実するために**

津市立一身田中学校

校長 横山 徳浩



**一 はじめに**

六月に学校が再開。毎朝、職員打合せが終わるとすぐに担任は教室で健康観察と検温カードを集める。副担任は廊下で検温カードのチェックと欠席者の確認。教頭と養護教諭と私は各学年の階のホールにて非接触型体温計で検温を忘れた生徒の体温を測る。一週間で担当学年は交代する。一学年百五十人、百八十人、籍している中で、毎日各学年とも五人、十人ほどの生徒が検温を忘れてくる。中には毎日のように忘れてくる生徒や遅刻と合わせ技の生徒もいる。検温時のあいさつと、お礼の言葉は忘れさせない。体温計が揃うまではこの役割は続くのだろう。しかし、私にとっては個々の生徒とわずかであるが声掛けや会話ができる楽しみなひと時でもある。

**二 コロナ禍がもたらしたもの**

本校は学校教育目標を「さとくやさしく、たくましく生きる生徒の育成」とし、その達成を目指し、様々な特色ある教育活動を続けている。まず、学校支援地域本部「サポート一いつちゅう」をはじめとする地域の人々の支援によるキャリア教育である。代表的なものが一年生で行う「会社をつくろう」という起業学習。商品を開発、製造し、一身田町の寺内町祭りで販売するという取組

である。次に三重大との連携活動。各教科の学習支援のため、大学生がティーチングアシスタントとして子どもたちを支援する。また先進的な教材の提供。例えば体育科のラートや、理科と家庭科のクロスカリキュラムであるニジマスの解剖と調理実習。コロナ禍のため、これらの取組が全く出来なくなった。毎日のように地域のゲストティチャーや大学生が多数来校している普段の姿がなくなったのである。

そのような中、最も変わったものが、数年前より取り組んでいるグループ学習やペア学習を重視した「協同して探求する学び」の授業形態である。グループ活動が出来ない、席はコの字ではなく従来のスクール席に戻さなければならぬ。学年が上がるにつれ、授業中に友だちに尋ねる事や困っている生徒に手を差し伸べる温かい関係性が築かれていき、教員も一定の成果を感じていたところである。

**三 歩みを戻さないために**

本校で新任の教員は六人いる。彼らはグループ学習やコの字の席での授業形態しか行っていない。他のベテラン教員からもグループが使えないという不安な声が聞こえてきた休校期間中に、三重大大学の岡野昇先生を講師にオンラインで研修会を持つ

た。「板書とトークによる伝達授業」にならないよう一斉授業の期間中に生徒の「つぶやき」を教師が、他の生徒につなぐことや、教師が話すことよりも「聴く」ことを大切に、気軽につぶやくことができる関係をつくることを再確認した。

学校再開直後、スクール席での一斉授業に違和感があるような二年生と三年生の様子があった。六月下旬より短時間で少し空き間をつくりグループ学習を再開することにした。授業を参観すると生徒の表情が明らかに違っていた。当初は年間四回計画していた公開授業研究会だが、六月と九月に講師を招いて校内授業研究会に切り替え、さらなる追求を目指している。

今、大学や地域との連携も形を変えて復活しつつある。コロナ後の授業がいつそう充実した学びになるようこれまでの取組を継続していこうと思う。



# コロナに、負けるな！

## 安全で、安心して 学校生活を送ることができる環境づくり

亀山西小学校

校長 中原 博



二月下旬、全国一斉の休業措置がとられ、今日に至るまで、これまでに経験したことのない対応が続いています。九月に入り感染症の状況は少し落ち着きを見せつつも、まだまだ油断の許さない状況は変わりません。異例の八月授業もあり、九月当初の酷暑・猛暑による熱中症対策も、学校運営に一層の緊張感を持たせています。足りない対応はないか、これで十分だろうかと日々検証していた時、特集「コロナに負けるな！」の原稿依頼をいただきました。多くの学校で行われていることばかりだと思いますが、本校の取組を紹介しつつ、本校の実践を振り返る機

会としたいと考えます。

三月頃、教育課程や行事等は変更のまた変更の連続でした。先の見えない対応が迫られ、ついつい管理職による判断が常態化してしまいました。四月に入り再度の休業措置の中で、同じように行事や対応に指示を出していたところ、職員から「もっとみんなの意見を聞いてください！」と言われ強く反省しました。それ以降は、急な市教委からの指示が来ても、学年代表等



による「学校安全衛生委員会」を定期的に開催し、皆の検討と合意のもと、学習対応・感染症対策等を進めることとしました。

### 一 休校中の学習指導（三月～五月末まで）

①まずは家庭学習課題の作成、そして家庭訪問による課題の配布。その後は回収と配布は保護者に來校いただく形にし、下駄箱を配布回収ポストとして活用しました。またこの時期、学校預かりの児童対応も多くありました。

### 二 学校再開後の学習指導の工夫（六月～）

①市教委の対策として、卓上シールド・フェイスシールドの支給。卓上シールド（写真）は、対面学習ができ、シールド内は必要に応じてマスクを外して活動を行います。報道機関が多く訪れましたが、保護者への安心啓発としては効果的でした。他にも、今後の課題の郵送受渡による「通信教育用」封筒や切手の支給、学習コンテンツの配信等、必要な対策が取られています。

### 三 学校行事の精選や工夫等

①行事は形や規模を変えて実施。どこの市町も同じだと思います。市教委からは新たに補助教材として施設見学地の動画をたくさん制作配信していただきました。

②児童とともに取り組む感染症対策。児童会で「T（手洗い）チャレンジ運動」の取組推進。しるやま集会（一年生を迎える会）は全学年が学級動画を作成し、児童会役員の進行で視聴し大変盛り上がりしました。また、Zoomを活用して始業式や終業式、立会演説会などを各教室で実施しました。感染症拡大の状況下でも自分たちでできる自治的な活動を進めています。

③感染症下における子どもたちの不安や心理状況を全職員がきちんと理解するための校内委員会やQ U研修会の実施。

### 四 保護者や地域の協力や反応

①学校行事の変更・中止は子ども・保護者・教職員にとって一番辛く残念なことです。理解や協力を得られるには、学校運営協議会の存在は大きいです。「六年生の保護者だけでも参観させてあげられないか」「一年生の保護者は給食の様子も見たいのでは」など貴



重なご意見をいただき、学校の運営・改善に生かすことができたいです。一定の責任も持っていたいただきながら保護者目線・地域目線の意見をいただけるので、学校長としては心強い組織です。

②市内では、地域住民や保護者による校内消毒作業を担ってらっている学校もありますが、本校では、市や県のSSSや学習指導員を活用し、消毒作業や教材準備等に時間を充てることで、教職員の働き方を一定改革することもできています。

これから先、感染症が及ぼす社会への影響が落ち着くまでは、緊張感を緩めず、これまで以上に子どもたちの状態を注視する必要があります。これからも、教育委員会の支援や指導を有効に活用し、「不安より安心、心配より明るさ」を、亀山西小ONE TEAMの気持ちで、安全安心な学校運営に努めていきたいと考えます。

## 「コロナに負けるな！」

四日市市立浜田小学校

校長 小林 一也



このお話をいただいた時、「コロナに負けるな？逆にコロナに勝つって、どんな学校を目指すこと？」と考え込んでしまった。校長としてできることは、感染予防をしながら、日常の学校生活にどれだけ近づけるかだと考え、教職員はもちろんのこと、子ども・保護者・地域の方にも、協力を呼びかけ、市教育委員会ともいつも以上の協力体制をとりながら、学校を再開した。3密を避けるための教室のレイアウト変更・掲示物や

動線表示、手洗いとアルコール消毒の徹底、校内の消毒と換気、アクリル板の活用（図書室カウンター・特別教室の固定机の区切り等）、授業づくりの制約（各研究協議会からできることと今は控えることを整理・提案してもらい、歌唱指導は一ヶ月禁止、家庭調理実習は二学期以降、体育は接触を避ける、ペア学習はことという入れ時を考えるなど）、研究授業は体育館で実施、学校公開日の保護者制限、運動会は午前中開催で二部制にして（保護者見学を減らす・徒競走は一組四人・表現運動は今年度は行わない等）、修学旅行は県内、社会見学の県外断念等々、学校独自の感染予防と市内共通の感染予防を組み合わせ、子どもたちの命を守るために、できることからやるといふ姿勢で臨んできた。時には、感染予防の呼びかけに、保護者からは「もつと厳しく」「国の政策に反する」と、両面から批判も受けたが、子どもの命を守ることと子どもたちの成長で答えるしかないと考えたことにした。

しかし、コロナ対策は決してマインスパかりではない。例えば、校内の研修を進めるために、ペア学習・班学習を大切にしてきたが、困った時のペア学習ではなく、子どもたちの学び合いが進むペア学習の入れ方やそのための課題提示と振り返り活動を極める研修が進

みつつある。また、激変したのがICT活用の授業づくりである。一人一台タブレットやGIGAスクール構想が、年度内に整備され、宿題のプリント提出もネットできるといったようになった。

「コロナに負けるな！」は、五月末の学校再開時点では、まさに「負けない、感染しない・させない」であったが、今は「コロナ禍だからこそできる新しい学校づくりを目指すこと」と考えている。

## 臨時休校におけるWeb授業による学力保障の取組

津市立東橋内中学校

校長 中川 克巳



新型コロナウイルス感染症拡大により再度四月十六日から臨時休校となった。こうした前例がない緊急的な対応が求められる中で教育的効果を上げるには、学校としての明確な意思を持つことが絶対条件である。

在籍生徒の50%が外国につながる生徒で、経済的に困難な家庭で過ごす生徒の割合も高い本校にとつて、臨時休校措置は唯一学ぶ機会である学校教育を奪うこととなり、本来この時期に身に付ける学力をどのように保障していくかが大きな課題である。

まず、令和元年度末の臨時休校の家庭学習を検証することとした。その

結果、既習事項のプリント学習では一定の成果がみられるが、未履修内容では市教委等が推奨している家庭学習サイトの活用を案内したが、「活用の仕方」が分からず、空欄での提出が多くあった。このように単にプリント配布やWeb教材の紹介だけでは、生徒の学力保障にはつながらなかった。

そこで、今回の臨時休校への対応について職員会議を開催し、事前の調査から生徒のネット環境が95%整っていることから、カリキュラムに沿った「Web授業」の実施を決定した。

しかし、教員には、動画配信に



b環境のない生徒への対応」等の懸念はあったが、教科書会社への利用申請書の提出やネット環境がない生徒へのパソコン教室の開放等の対応を図った。

「Web授業」は、YouTube配信で無料となる十五分以内とし、1コマの授業に対して二本の動画とした。また、勉強の遅れや人間関係で不安感が蓄積する可能性があることから、心のケアとして「健康管理法」「ストレス発散法」等を配信したことにより総配信数は四九五本となった。

五月十八日の学校再開

後に学習状況を確認したところ、「Web授業」を視聴しなかった生徒には学習の遅れが見られたため、五月末までは配信した動画を基に授業を行うとともに、放課後にパソコン教室を開放し、補充学習を行った。その結果、通常のカリキュラムから大幅に遅れることなく、負担のない指導計画に戻すことができた。

また、生徒の反応では、「分からないところを繰り返し見られる」「短時間で分かりやすい」等と回答が多くあり、保護者は「先

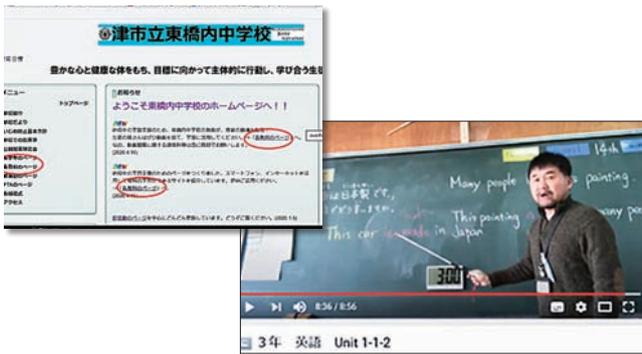


生の姿が安心感を与える」「迅速な対応がよい」と「Web授業」を評価している。さらに教職員では、取組を通して「発問力や解説力」が向上したと感じられ、危惧していた事象より学力保障への責任感と手応えが勝り、不安感の解消にもつながっていった。

今回の取組の重要なキーワードは、「使命感」と「スピード感」であった。たとえ臨時休校という困難な場合であっても、教育の目的を明確に持ち続けるならば、既成の概念や取組に左右されることなく、

具体的行動に迅速に移すための意思統一がなすべき取組の第一歩である。

項目	内容
4/7	緊急事態宣言 臨時休校措置 4/15～
4/10	企画会議Ⅰ 学力保障策の検討
4/12	企画会議Ⅱ Webサイト活用法の検討
4/13	職員会議Ⅰ 学力保障策の共通理解
4/14	Web活用授業 学習支援サイトへのアクセス方法
4/15	職員会議Ⅱ Web授業について検討
4/16	校内研修 Web授業作成について
4/17	Web授業開始 教科、道徳、特別支援他



### ちよっといい話 ジャンケンポン

鳥羽市立鳥羽小学校  
校長 濱田 浩



「あつ、ジャンケン先生や！」  
下校指導の帰り道に出会った子どもからの言葉です。着任式の自己紹介で「ジャンケンが好きです。」と言い、一回目をしました。初めて出会った子どもたちは、不思議そうな顔をしながらも応えてくれました。翌日からは新一年生も加わり、学校でのジャンケン生活(?)が始まりました。「ほんとにしてくれるかなあ。」という不安はどこへやら。どの学年の子も私の顔を見ると、「ジャンケンしよ。」と言ってくれ、毎日欠かさずしてきました。相手をしてくれる子どもたちには感謝の気持ちでいっぱいです。保護者の方から、「校長先生とジャンケンするのが楽しい。」と言っています。といううれしい言葉をいただきました。

休校期間中には、学校配信動画の最後に「校長先生とのジャンケンコーナー」を職員が挿入してくれ、家庭での話題に上ったというおまけもありました。  
「なんでジャンケンが好きなん？」と子どもたちから何回か聞かれました。「だって楽しいやん！」と答えました。そこで、もう一度ジャンケンについて考えてみました。  
①いつでもどこでもだれとでもできる  
②何度でも楽しめる  
③道具がいらない  
④グー・チョキ・パーの関係性(勝ち負け)が平等  
⑤コミュニケーションが図れる  
⑥子ども理解につながる  
ジャンケンをする時の子ども様子はさまざまです。積極的に自分からやりに来る子ばかりではありません。横で見ている途中から参加する子、じつと見つめアイコンタクトができてから始める子、こちらが声をかけると乗ってくる子など。どの場合でもジャンケンをする笑顔になったり、悔しそうな顔になったり、「もう一回。」とアピールする顔になったりします。いろいろな態度や表情を見ていると幸せな気持ちになります。これからも続けたいと思います。

# ピンクシャツウィーク

木曾岬町立木曾岬中学校  
校長 水谷 予司之



今年度は始まってすぐに臨時休校となり、学校が再開されたときには、授業時数確保や感染防止対策でいろいろな学校行事や生徒会活動も中止や延期が相次ぐ状況で、生徒たちは感染防止を意識した授業と部活動に参加するだけの毎日をお過ごししていました。

六月初旬の運営委員会で「いじめアンケート」と六月まで延長された県の「いじめ防止強化月間」の取り組みが議題に含まれており、日時や内容が調整されました。

次の週の職員会議の中で、アンケート用紙の内容説明とピンクシャツ運動の紹介がありました。

十六日にアンケートを実施し、その日から十九日までをピンクシャツウィークとして「先生方はピンクのものを身につけましょう。」という提案がされました。

た。

十六日朝の打合せ時の職員室はピンクのシャツやピンクのものを身につけた職員ばかりでいつもと違う光景でした。

生徒たちは授業に現れるどの教員もピンクのものを身につけているの不思議そうに見えました。

帰りの会で「いじめアンケート」を記入し、各担任からいじめ防止の話とともにカナダのハイスクールでの出来事をきっかけに世界中にピンクシャツ運動が広まったことを紹介してもらいました。

すると生徒たちから「自分たちも何かピンクのものを身につけたい」という声が上がりました。

その声を受けて生徒会執行部が話し合いをしてくれました。

話し合いの結果は、「ピンクの画用紙を桜の花の形に切り取り、両面テープで胸につけられるようにして全校生徒に配る。」というものでした。すぐに準備を始めて、翌日に作業を完了してくれました。

十八日の朝、生徒会執行部が全校生徒に配布してくれました。

十九日までの二日間、ピンクの桜を胸につけた生徒たちの顔は、いつもより笑顔が多く、表情も穏やかに見えました。

## 特別寄稿

# 目に見えないもの

三重県PTA連合会  
第42代会長 美濃 松謙



りです。

私は生まれも育ちも現在も伊勢市で生活をしております。この地域の風習をご紹介します。きたいと思います。もちろんご存じの方も多いと思いますが。蘇民将来の民話。伊勢志摩地方では玄関に歳の暮れにかけたしめ縄を一年中かけています。そのしめ縄には木札が掲げられ「蘇民将来子孫家門」とその両側に七福即生、七難即滅と書かれています。これはいつの頃から定かでは無いようですが、かなり古くからの風習で言い伝えられた民話から来ています。私たちが生まれるずっと前からこのような感染症により、多くの方が苦しめられ、その苦難からなんとかして逃れたいという一心で民話が生まれ、現代にまで受け継がれていることと思います。科学的に全く根拠のないしめ縄を玄関に飾り家族に難なく、福が訪れることを願います。

ン開発を願う、だれが優先的に摂取できるのかという議論がわき起こり、ワクチンの争奪戦が予想されています。科学で証明されない行いは全く意味がないこととする風潮にあります。先祖代々受け継がれた言い伝えを鼻で笑うのか、はたまた大切な事として考えるのか。現実には科学の力が必要ですが。しかし、私は目に見えないものへの畏怖の念、大自然への畏敬の念を感じつつ生活することも人として大切なことと考えています。そのような思いを持つことで私たちは人を思いやり、寄り添う気持ちで育まれてくるのではないかと思っています。

三重県PTA連合会は今年度で設立70周年となります。日頃よりPTA活動に多大なるご理解とご協力をいただいておりますこと心より御礼申し上げます。今年度は70周年を記念して、令和三年三月六日三重テレビにて特別番組の放送を予定しております。是非ご覧いただければ幸いです。

デジタル化が急速に進み、世の中の全てが0か1、白か黒で判断され、その技術を習得することは大いに必要ですが、幼年期にその真逆にあるものも言い伝えて行くことは大切な事だと考えています。

さて、このコロナ禍で社会全体が困難な状況におかれています。が、先生方においても感染防止対策や授業時間減少への対応、イベント等の検討課題が山積で大変な一年であったことと拝察申し上げます。加えて学校内だけでは無く、生徒のご家族や地域の感染状況まで思慮いただきますこと、改めて御礼申し上げます。ただただ一日でも早く収束することを願うばかりです。

最後に申し上げますが、三重県小中学校校長会の益々のご発展と皆様のご多幸を心よりお祈り申し上げます。

# 地区校長会だより

## 名張市小学校長会

### 情報共有を力としながら

名張市小学校長会は14校の小学校の校長で組織しています。月一回（年間10回）、市内中学校と合同の小中学校長会を開催し、名張市教育委員会から指導・連絡を受けるとともに各校の共通理解・情報共有を図っています。本年度は、コロナウイルス感染防止のための臨時校長会を何度も開催しました。感染症対策や行事予定の変更等、情報を共有するとともに他校の取組を参考としながら各校の学校運営に役立てています。コロナウイルス感染防止の対応は初めてのことでなので決断をする際はいへん不安になることもしばしばあります。「運動会どうしよう。密集、密接は避けられないなあ。」「うちは保護者参加なしでスポーツイベントをやるつもり。」「授業参観は中止にするしかないかなあ。」「私の学校では保護者をグループ分けにして、一回の参加人数を限定して実施します。」「野外活動は実施できるかな。」「狭い部屋での宿泊や大浴場での入浴は感染の危険があるので、日帰りを実施しようと思います。」



「修学旅行はどうしよう。」「目的地的である京都での感染が広がっている。」「行き先を県内に変えよう」と旅行代理店と交渉しています。」等々、校長会で話し合いました。情報共有した他校の取組が、校長としての決断に自信と安心感を与え、大きな力となります。しかし、一律に取組内容をそろえるということとはしていません。各校で規模や施設、また地域が違うため、そろえるということが各校の特色や良さを弱めてしまうかもしれない

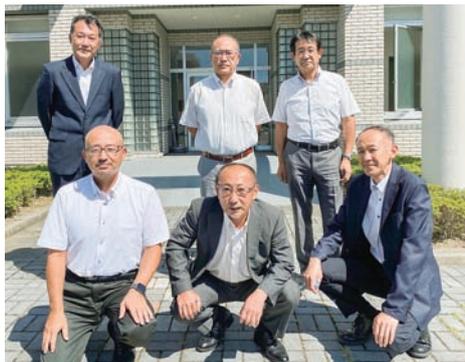
### 「チームワークの良さを生かして」

## 志摩市中学校長会

伊勢志摩サミット開催地となった志摩市は三重県の東南部に位置し、全域が伊勢志摩国立公園に含まれており、美しい自然に囲まれ、恵まれた気候や地の利を生かした観光業・豊かな食材で水産業や農業、観光業が営まれている地域です。

志摩市では、次代を担う子ども一人一人が、自ら学び、豊かな感性や創造性と郷土愛に満ちた人間に成長できるよう学校教育を充実してきました。同時に文化的な活動や国際交流などの生涯学習を通して、これまでの成果を生かしながらふるさとを誇ることができる教育をめざしています。

現在、本会は、市内の六中学校の校長で構成され、志摩市の教育の充実と発展のため、日々取り組んでいます。平成二十四年度までは、十一校で構成されておりましたが、学校再編が進み平成三十年



度からは現在の六校になりました。月一回の定例会では、午前中は、七名の小学校長会のメンバーとともに志摩市小中学校長会として小中両方にかかわることについて、午後からは、中学校長部会として今日的な教育課題や進路保障・中体連関係等について話し合っています。特に午後からは、六名という少人数でもあり、日常の課題や悩みを共有し、共に考え有益なアドバイスをもらえることも多々あります。本年度は、新型コロナウイルスの感染拡大に伴って多くの臨時校長会議が開催されましたが、初めての事態にどのように対処していったらいいかお互い情報交換しながら知恵を出し合う貴重な機会となりました。

今後も少人数ならではのチームワークの良さを生かしながら活動をしていきたいと思います。

●原稿募集  
会員の皆様の投稿をお待ちしています。なお、内容・字数等につきましては事務局へお問い合わせください。

●「校長会みえ」について、ご意見・ご要望があればお聞かせください。

三重県小中学校長会  
広報委員会

## 編集後記

三重県の小中学校長会広報「みえ」の第五六号を発行するにあたり、執筆を依頼させていただいた先生方には、校務ご多忙の中、原稿をお届けいただき、誠にありがとうございました。心よりお礼申し上げます。

また、新型コロナウイルス感染症に対する心配や不安が続いている中、各学校では、学習指導の工夫や、運動会・修学旅行等の学校行事の実施に対してご苦労されたことと思います。今後は、感染症予防とともに、新型コロナウイルス感染症に係る「偏見・いじめ・差別」をなくす取組も重要であると考えます。教職員が安心して働ける、そして子どもが安心して学べる学校環境をつくるため、リーダーシップを発揮して頑張ってください。

今号では、今日的課題の克服に向けた地域での取組や、特集「コロナに負けるな」と題して、休校中の学習指導対策、学校再開後の学習指導の工夫、学校行事の精選や工夫等についての記事を掲載させていただきました。この会報が、学校が抱える様々な課題に向き合い、努力を続けておられる校長先生方の力になれば幸いです。今後とも、ご支援ご協力をよろしくお願い申し上げます。